琉球大学学術リポジトリ

「授業と学習集団」研究の動向：1990～92年

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部
	公開日: 2007-07-19
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 藤原, 幸男, Fujiwara, Yukio
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/1086

「授業と学習集団」研究の動向

——1990～92年——

藤　原　幸　男

Several Trends of "Teaching and Learning Collective" in 1990～92

Yukio FUJIWARA*

(Received April 30, 1992)

本稿は、先に発表した論文「1980年代における学習集団研究の動向」(『琉球大学教育学部紀要』第36集、1990. 3)に続くものである。1990年から92年4月にかけての「授業と学習集団」研究の動向をいくつか取り上げて、紹介することにする。

1. 子ども・教師の状況と学習集団づくり

80年代とくらべてみれば、90年代にはいると、一般教育雑誌において、学習集団づくりの論文、およびその思想にもとづいた班学習の論文は、掲載されることがますます少なくなってきている。このことをまず指摘しておく必要がある。

有園格「班学習の功罪」(『児童心理』91. 7)は、班学習を困難にしている背景を追求し、的確な分析をしている。有園によれば、「班学習と正面から取り組んでいる教室の実践家は今日の教育界の状況からは少数派といってよい」と述べている。一般教育雑誌における学習集団づくり関係特集・論文の少なさは、こうした状況を反映している。少数派となってきている背景について、有園は社会環境の変化による児童生徒の価値観・行動の変化、教師の力量形成の問題、教育界における個性化・多様化論を背景にした教育観の変容をあげている。

まず現代の子どもの状況として、①偏差値中心の教育、管理主義教育の浸透、②子どもの生活意識・価値観の変化、③人間的自立のおくれと人間関係形成の未熟さなどがあって、班づくり・班学習が困難になってきている。そのために、「こうした問題状況の発生は教師の側にもきめこまかな配慮と意図的計画的な指導性が要求される学習集団づくりを回避させる姿勢をとらせ、安易な画一的一斉授業による学習指導をとらせるようになった」と分析している。学習集団づくりにおける班学習はきめこまかな配慮と組織的力量を教師に必要とするのであり、そうした配慮と力量を身につけようとする勇気と情熱のある教師が少なくなってきている。「問題意識の欠如と教師の管理主義的傾向」が大きな障害になっているとしている。さらに、「情報化・国際化の波を受けた教育改革の動向のなかで、〝個性尊重の教育〟と価値観の多様化に対応した〝個性を生かす教育〟の重視は、集団思考より児童生徒の興味・関心を重視する個への対応重視の志向へ教師の目を向けさせ、集団づくりのなかの個性育成の問題が軽視されるという不幸な状況も育てつつある」としている。

こうした状況を認識して、最近において『現代教育科学』誌は「特集、子ども集団が持つ教育力を見直す」(91. 4)、「特集、『集団をつくる力』の再評価」(91. 11)を企画・編集している。また、学習集団づくりを一貫して追求してきた吉本均らは、まなざし・身体を軸にすえて学習集団づ

*Department of Education, college of Education, University of the Ryukyus.

くりを再構築し、機関誌として『授業と学習集団』を刊行し、第1号（90. 3）で「学習集団づくり第1歩」を特集し、第2号（91. 5）で、「『まなざし』と『問いかけ』」を特集している。同じく、学習集団の指導を一貫して追求してきた全国生活指導研究協議会は、『新版・学級集団づくり入門、小学校編』（90. 5）、『新版・学級集団づくり入門、中学校編』（91. 6）で、「授業と学習集団」研究の新しい展開を模索している。

2. まなざし・身体と学習集団づくり

吉本均は、一年間にわたる連載「学習集団で授業を改造する」（『中学校学級経営』91. 4～92. 3）において、従来の論を継承しながらも、形態論・組織論からの接近をやめ、関係論的アプローチをとることを明確に述べている。

「その後、わたしは学習集団という組織論的ニュアンスの強い用語よりも、もっと実践的な用語として、相互主体的、間主体的な応答関係をつくりだすために重要なキーワードと技術を明確にしたいと考えているのである。」（連載第2回「教室を『学問する、まなざしの場所』にする」）。

「わたしは、従来の授業指導論や学習集団論において、身体的応答という問題が欠落していたと思う。／そのことを反省して、形態論、組織論ではなく、……まなざしの表情で交わり合う技術、ことばを身体にのせて語り合う相互的、応答的な『関係の知』として、『呼応のドラマ』として、われわれの教授学や授業論は構築されなくてはならない、とわたしは考えている。」（連載第10回「授業のクライマックスと学習集団」）。

吉本は、基本的には、教師の呼びかけによって応答をひきだすという路線で教授主体と学習主体の関係をとらえ、そのもとで関係論的組みかえを構想している。

これに対して、齋藤浩志は、「教育実践において、子どもは単に『教わって育てられる客体』ではなく、教えられることを通じても、また自分の生活経験や興味や関心によっても、結局は『自ら学びつつ育つ主体』なのである」とし、教育と自己教育の統一において教授主体と学習主体の関係をとらえている。教室での教授＝学習も、この点からすれば、教師の「人間としてのあり方」を媒介として作用するのであり、なにげない日常レベルでの人権尊重の行為が大きく影響する。人権尊重にみちた日常のまなざしを媒介として信頼が育っていき、教育一自己教育関係が成立していくのである。このようなとらえ方から齋藤は、学校での教育実践の枠組みとして、価値の軸、価値の継続的展開としての時間の軸、価値の相互交流の展開としての集団の軸の三つを設定し、三つの軸の結びつきにおいて教育実践（授業）をとらえる。関係論的視角を強く打ち出しながらも、吉本とは違った視点から授業指導論の構想がみられ、新しい学習集団論の芽がみられる。（齋藤浩志「教育実践学の基本視点」、齋藤編『教育実践学の基礎』青木書店、1992．3。齋藤浩志「授業とは何か」『作文と教育』1991．3臨時増刊号も参照。）

3. 授業における学習主体の自立と学習集団の形成

石川正和を中心とした広島グループは、共同労作として『子どもの自立と授業の科学』（91. 2）を公刊し、学習主体の自立という角度から学習集団づくりに接近している。

石川によれば、子どもは学習主体であるとともに生活主体であり、そういう主体が日常（生活）の世界から科学の世界へとわたっていく過程が学習である。科学の世界へのわたりとしての学習行為には、認識と行為とが含まれている。学習集団は子どもの認識を媒介するとともに、行為をも媒介する。「認識は相対的には一時間の授業において、1つのまとまりをもつものとして組織される、自己完結性をもっているのに対して、行為の組織化は1時間の授業をこえた歴史性をもっている」のであり、「行為における自治・自立と認識における自由と創造とを確立していかなければならない」とする（同書、10～11頁）。

この石川の問題提起を受け継いで、山本敏郎は、学習行為の共同性には、認識獲得にかかわる共同性と授業参加にかかわる共同性があるとする。後者にかかわって、現実の子どもは「できる一できない」「強い一弱い」という関係をもちこんでいる。「真の学習主体はこうした既存の関係を問い、学習という活動をとおして対等平等の関係に改造

していくものでなくてはならない」とし、「既存の関係から抜け出し、新しい関係を創造しなおすという意味で、学習主体としての自立という方がふさわしい」とする。この既存の集団関係から学習主体として自立させる指導が学習規律の指導である。ここでの学習規律の指導は、スタイルの形成だけでなく、共同学習的な学習観の形成を含む（同書、24～26頁）。学習規律における学習観の重要性に着目されていることに注意したい。ここに、新しい学習規律論がみられる。新しい学習規律論は、住野好久「全員参加の学習規律をどう高めるか」論文でくわしく展開されている（住野好久「授業における学習規律に関する研究」『教育方法学研究』16巻、91．3も参照）。

「学習主体の自立と学習集団の形成」の理論構想にもとづいて、同書では、広島市での授業実践の分析をし、庄井良信を中心として、授業研究の新しい方途を探り出そうとしている（庄井自信「『自立』を追求する授業とは何か」『生活指導』91．9も参照）。

4. 授業外での学習活動の重視、授業における自治の重視

全生研は80年代後半から集団づくりの新しい展開を追求し、学習集団の形成・指導についても、新しい構想を追求しはじめてきている。その追求の成果が、『新版・学級集団づくり入門、小学校編』（90．5）、『新版・学級集団づくり入門、中学校編』（91．6）として公刊されている。

『新版、小学校編』では、学習集団は生活の共同化に取り組むものであるとされ、学級集団づくりは自治的集団の形成と平行して学習集団の形成を課題とする、とされる。全生研の従来の学習集団の形成構想は、どちらかといえば授業における学習集団の形成・指導に限定されていたが、この『新版、小学校編』では、教科外領域における学習集団の形成を視野にいれ、それとの相互関連で授業における学習集団の指導をとらえている点に新しさがある。教科外領域における学習集団の形成では、①自他の生活や集団の生活を意識化させていくための学習活動（生活勉強）、②学習のおくれている子に取り組む学習活動や授業内容の習熟のための学習運動、③文化活動や授業との関連で組織される学習活動、の三つをあげている。②学習のおくれている子に取り組む学習活動や授業内容の習熟のための学習運動は、従来も位置づけられていたが、今回、学習共同化の基盤としての生活勉強が意識的に取り上げられている。また、③文化活動や授業との関連で組織される学習活動では、「学級の文化活動は、このような授業改造と結びついてこそ、はじめて豊かなものに発展していくのである。その意味では、小学校の学級集団づくりは、授業改造と文化活動との相互交流をもっと追求してもいいのではないだろうか。」と提起しているが、相互交流の重視という点に注目する必要がある。

『新版、中学校編』では、まず、学習集団の形成・指導における学級担任と教科担任の協同をとりあげ、そこに新しい学習集団の形成・指導の展望をみいだしている。「学級担任は、生徒たちの生活・学習要求を組織して、授業外の多様な学習活動を組織していくと同時に、学級の側から授業への目的意識的な取り組みを組織していく。それと同時に、授業内外の学習規律の確立にも取り組んでいく。」とし、「教科担任は、教科内容の指導と学習集団の指導を統一的に展開しながら、授業づくりを進めていくと同時に、授業における集団づくりをつうじて、授業内の生徒達の諸問題の自主的解決に取り組んでいく」としている。学習集団の形成にあって、こうした相互支援が必要になってきている。

『新版、小学校編』と同じく、集団づくりにおける学習活動を重視し、それとの関連において授業における学習集団の形成・指導を構想している点が、新しい傾向だといえる。この点にかかわって、次のように述べている。

「これまで集団づくりにおいては、学習活動、それも授業にかかわる学習活動を組織することは、自主的活動を学校臭いものにするために好ましくないとされてきた。／しかし、学習問題が生徒たちの最大の問題になっている今日、学級集団づくりといえども、これを避けてとおることはできなくなってきている。いや、それどころか、学習活動と授業への取り組みを避けては、集団づくりさえすすまないというのが今日の状況である。」（『新版、中学校編』、226頁）。

そして、学級担任がとりたてて組織する自主的な学習活動を、学力保障のための学習活動と文化活動としての学習活動に分けている。学習保障のための学習活動には、①授業内容の習熟のための学習活動、②学力補充・学力回復のための学習会をあげ、文化活動としての学習活動には、①学級の現実を問題化するための調査・研究活動、②学級成員の相互理解を深めるための学習活動や生徒が抱えている問題についての研究活動、③文化活動を発展させるための学習会、④集団づくりのなかの民主主義、自治活動の政治的・道徳的意義を意識化していくための学習活動、⑤授業の発展としての学習活動、⑥進路問題について学習活動などをあげている。こうした幅広い学習活動を組織・展開し、それと関連づけて授業における学習集団の形成・指導を構想することによって、学習集団の形成・指導をめぐる隘路を切り開こうとしているように思われる。

こうした授業外での学習活動の組織化・指導と平行して、授業のなかでの学級集団づくりにも取り組み、授業内での生徒たちの諸問題の自治的解決に取り組んでいくとしている。「授業のなかでの学級集団づくり」という表現には若干問題がないわけではないが、この表現のもとで実践しようとしている内容は重要である。

5. 討論・ディベートと学習集団

討論が成立しにくいといわれている。この状況に対して、生徒を討論・論争に引き込んでいくために、①集団遊びをつうじての身体的交流、②ロゲンカ・悪口・自己主張の組織化、③身体的表現による現実認識、④群読・シュプレヒコール、⑤劇化による討論の組織化などの特別の手だてが必要である、とされている（『新版、中学校編』）。子どもたちの状況を考えると、このような多様な自己表現・自己主張の工夫が必要になっていることはまちがいないし、このような手だてによって、豊かな討論が切り開かれていくように思われる。

このような特別の手だてとも関わって、いまディベートの教育的導入が注目されている。ディベートとは、二組のグループが、一定のルール（人数・進行方法・審査方法など）にしたがって、一つの論題について討論する方法で、企業経営などで活用されてきた。『新版、中学校編』では、このディベートの方法を教育に導入して、「ものごとを論理的、倫理的、政治的に考え、討論・論争するちからを生徒たちにつけていく」ことがめざされている。

湯浅恭正によれば、ディベート実践は、さきにあげた討論の特別の手だてとおなじく、「安心して自己の主張を展開し、自信と勇気をとりもどす場所を学校につくり出す取り組みである」としている。また、ディベート実践が生活指導に意味をもつとすれば、「生活に対する自己の立場を意識化させることにあるのではないだろうか」とし、授業・学習集団と関連づけるとすれば、ディベートはあくまでも論争のしかたを教えるための一つの形態にすぎず、むしろ日常的な授業での問答・討論のなかでディベートの力がついていくのではないか、と述べている。この点は今後さらに検討していく必要があるだろう。教科内容の指導を通しての認識の獲得と結びつけていえば、「学習の中で習得した知識や概念をもとに、世界の現実、学級・学校の現実、進路などをめぐって論題化」し、ディベートすることをとおして、「子どもたちは、教科で学ぶ知識の意味や、学校での教科・学習の意義をみつめ直していくことができる」としている。（湯浅恭正「ディベートと集団づくり」『生活指導』91. 12）

「特集、ディベートを授業にどう取り入れるか」『現代教育科学』（91. 6）では、授業でディベートが成立する条件、ディベートにむく論題、ディベートを授業に取り入れて、などについて実践者の見解を掲載している。ディベートの本格的導入への着実な一歩を示しているといえる。

6. 階層分化・「落ちこぼれ」問題と学習集団

90年代にはいって階層拡大・分化が明白になってきている。階層拡大・分化の実態は久富善之の分析によって鮮やかに示されている。いまや、階層分化と結びつけて教育の諸問題を考察することが不可欠になってきた。階層分化と教育については、「特集、階層分化のなかの学校」（『教育』92. 2）で詳しく分析・検討されている。階層分化と集団づくりについては、同上誌同号収録の浅野誠・鈴木和夫「学級集団づくり実践と階層問

題」、神保映「小学校現場からの報告」（『生活指導研究』8号、91. 9）、宮本誠貴「階層分化の中の班づくり」（『生活指導』92. 2）などを参照されたい。

竹内常一は「『落ちこぼれ』問題をどうとらえなおすか」（『生活指導』92. 2）において、「落ちこぼれ」問題は、80年代前半を境にして、新しい様相をとるようになっていった、とする。学校は高得点競争を推進し、経済的・文化的貧困層の子どもに深刻な「低学力」と「知的荒廃」をもたらした。それだけでなく、高得点競争への参加を余儀無くさせられた中流階層の子どもたちにも、「学力の空洞化」をもたらした、という。みかけは読み書き能力がついているように見えるが、世界を解読し自己を表現していく読み書き能力を獲得しているとはいえない。科学の基礎的概念は暗記されているだけである。操作はできるが、知識体系の結節点をなす概念として理解・習熟されているのではない。そのために、ものごとを体系的・全体的に認識することができない。このような学力の空洞化によって、「なにを学んでも、かれらのまえに生きるに値する世界がせりあがってこない」し、「いくら学んでも、世界を意識することも、それを意識化する自己を確立することもできないで終わる」「学びをとおして世界と自己の主人になっていくことがなく、ますます支配の傘のなかに閉じこめられていく」。こうして、学びの復権が今日大きなテーマとして浮かび上がってきているのである。

このなかで、竹内は、一つには、自主参加を原則とする学習会、夏休みの合宿学習会などをとおしての生活と学習の民主的共同化が重要であり、それらをとおして社会と世界に開かれた形で学びを切り開くことが重要である、とする。二つには、学習集団の指導をあげる。「授業そのもののなかで、学習の民主的共同化を追及する授業のなかの集団づくりとして、また、授業における学習の協同的関係を発展させつつ、意識的に学習目標を追及していく学習集団の指導として展開されてきた」のであり、この学習集団の指導を意識的に追及していくことが重要である。竹内は、このふたつは、一元的な「学校知」をこえて、現代を生きるに必要な「知」を追及していくものであった、とし、「わたしたちは、いま、こうした実践を積極的に継承しながら、それをグローバル・エデュケーションといういまひとつの道に開いていく必要があるのではないか。そうすることによって、学びの復権を可能にするとともに、現代を生きるに必要な『知』をすべての子どもに保障する新しい『課程主義』を確立する必要があるのではないだろうか」と述べている。4であげた「授業外での学習活動の重視、授業における自治の重視」とも重なっていくが、『新版』での学習集団論は、こうした「学力問題」の認識をもとにそれが打ち出されていることを押さえておく必要がある。

なお、竹内常一「『落ちこぼれ』問題をどうとらえなおすか」と関わって、同「日本の授業のゆくえ」（『ひと』90. 10）、同「いま高校生をどうとらえるか」（『季刊・高校のひろば』1号、91. 9）を参照されたい。竹内構想の評価については、吉田和子「高校実践課題と学力問題」（『教育』92. 4）が的確であり、示唆にとむ。

7. 生き方の追求と学習集団

上記の竹内論文のなかにすでに提起されているが、学習集団の問題は生き方の追求をともなわざるをえない。新しい生き方の追求とともにしか、今の時代における学習集団の新しい展開はありえないことを押さえておく必要がある。

汐見稔幸は、イタリアの中学校の例をとりあげて、「国民の一人（あるいは未来の国民の一人）として、避けて通れないような重要な政治・経済問題にたいして、一人ひとりがきちんと、＜私は○○と考える＞という判断をもてるようになることを、中学生の段階から子どもたちに期待し、そのために貴重な学校の時間をさいていた」と述べる。「授業というのは、そのつどそのつどの文化への参加＝創造という実感の伴うものでなければならない。他人の意見を深くきき、ときに自分の偏見がはがされていくこともまた喜びなのだ」と述べ、討論の授業の重要性を指摘している。（汐見稔幸「新しい学校像をさぐる」、堀尾輝久ほか『中学校・高校生の発達と教育3、学校をつくり変える』岩波書店、90. 10）。

『生活指導』91年8月号は「学級の中に世界の現実を」を特集している。そのなかの「主張」で、

坂本泰造は、なぜ、いま、「学級の中に世界の現実を」なのかと問い、一つには、人類的課題である平和・軍縮・人権・環境・開発などの問題が、一人ひとりの子どもの現実の問題として、深く関わってきているからだということ、二つには、「学級の中に世界の現実を」呼び込み、世界に開かれた世界観・価値観・生き方を子どもと共につくりだすという視点をもたないと、学校・子どもをとりまく「精神的鎖国状況」は克服できないからだ、としている。この見解は重要であり、こうした文脈の中に学習集団の問題を位置づける必要がある。同誌同号には、こうした視点からの論文・実践記録が掲載されていて、示唆をうける。

学習集団のなかでの「観」の形成については、子安潤「授業と生活指導 ―『知』の形成は『観』の形成とどうかかわるか ―」（折出健二・近藤郁夫・坂本光男編『生活指導にいどむ』青木書店、91. 3）を参照されたい。

8. 学習集団指導のすじみちの追求

愛知生研学習集団研究部会の共同労作『学習集団の指導技術』（明治図書、91. 4）が刊行され、教科の本質を追求する学習集団のすじみちが、発展段階（初期・展開期）にわけてていねいに叙述され、それに即して指導技術が具体的に提示されている。また、学習集団・授業づくりを実践的に追求してきた坂本泰造は、坂本『名人への道、授業づくり』（日本書籍、91. 7）において、学習集団指導のすじ道 ― 年間の見通し―、学習規律・学習スタイルの指導のすじ道 ― 年間の見通し―を「構造表」の形で具体的に示している。学習集団指導の具体像と指導技術を明確に示していて、いずれも参考になる。ただ、今日における『新版』の提起、「学級の中に世界の現実を」の提起は、学習集団指導のすじみちにも影響を与えるのではなかろうか。この視点から学習集団指導のすじみちを再度見直す必要があるようにも思われる。

「授業と学習集団」に関する研究文献（1990～92）

年　月	著書・論文　　所収雑誌・出版社
1990. 1	桑原昭徳「学習規律の対象化の場と指導方法」（『山口大学教育学部研究論叢』第39巻第3部）
3	吉本均他編『授業と学習集団』第1号、明治図書 〔特集・学習集団づくり第一歩〕 Ⅰ　学級づくりと授業づくりの一体化 ―『まなざし』で身に語りかける 1. 教師の呼びかけが子どもを変える（祖一順子） 2. 「勉強しすぎて困る／」子を育てる（小杉弘行） 3. 〔分析〕キーワードは共感・要求、自治・自立（阿部好策） 4. 学習内容とともに人間の生き方をも教えたい（秋元美知子） 5. 今、班に求められているもの（北本みつ江） 6. 〔分析〕わかりあう授業、生き方の教育も「班での出会い」から出発する（桑原昭徳） Ⅱ　全員参加の学習規律 ― 全員のうなずきと応答を指さす 1. 話し合い活動を豊かに ― 5歳児の実践 ―（徳田恵子） 2. 発言できない子どもにどう取り組むか（常田義博） 3. 「注意」を「評価」に変えて学習規律をつくる（門川之彦） 4. 〔分析〕「活動内容」と「励ます評価」で（上野ひろ美） 5. まなざしで向かい合い、心で語りかける授業の創造（北海道岩見沢市立東小学校）

年　月	著書・論文　　所収雑誌・出版社
1990. 3	6. 全員参加の英語学習をめざして（東すみ江） 7. 〔分析〕子どもの納得をひき出す学習規律づくり（湯浅恭正） Ⅲ 学習集団の自己指導力 ── 指導的評価活動で「かかわり合う」関係を育てる 1. 評価活動による子どもたちの変容（兵庫県宍粟郡安富町立安富南小学校） 2. 荒れた学級をやる気のある学級に（田口幸夫） 3. 〔分析〕共感的要求が自主性を育てる（小野拡男） 4. 「一週間のレポート」の取り組みを通して（相原信也） 5. かかわり合う関係をどう育てるか（菊留一男） 6. 〔分析〕個の自立と集団の自治を統一した指導と評価（山下政俊） Ⅳ 学習集団における個と集団の統一 ──「わからない」を授業進行の原動力にする 1. 授業をごまかさない子に育てる（村上和子） 2. 〔分析〕「授業をごまかせない教師」の共感的要求（戸塚茂則） 3. みんなで要求し合い、わかり合う体制をつくる（塚原雅敏・早田雅彦） 4. 「求めて」学び、実践する生徒を育てる指導（秋田県湯沢市立山田中学校） 5. 〔分析〕呼びかけ・誘い、ねうちづけ、選ばせる指導（寺尾慎一） Ⅴ 授業のヤマ場 ── 発問（対立・分化を呼びおこす）で集団思考・問答の深化・発展をはかる 1. より具体的な発問を！（柴田城治） 2. 教えたいものを持ちヤマ場をつくるために（広島県豊田郡瀬戸田町立北小学校） 3. 〔分析〕ヤマ場をつくる（久田敏彦） 4. 教科内容の本質に迫る対立・分化の設定（三浦正彦） 5. 発問づくりと主体づくり ── ヤマ場を構想する二つの筋道 ──（山口大学教育学部付属光中学校） 6. 〔分析〕発問でしかける（豊田久亀） Ⅵ 学習集団の自立過程 ──「接続語」（日常語）でからみ合う授業をつくりだす 1. 「いいです」「おなじです」を打ち破り、自分の言葉（接続語）でからみ合う授業をめざして（越　雅代） 2. 〔分析〕教師からの自立と一人の発言からの発展をつくりだす（深沢広明） 3. 主題を追求し、高まりのある授業をめざして（脇桝訣子） 4. かかわり発言の育成と対立点を明確にし、からみを導き出す（伊藤妙子・時永益徳） 5. 〔分析〕「接続語」でのからみ合いを成立させる（岩垣　摂）
3	「特集・学習に『共同』して取り組む」（『生活指導』410号） 折出健二「いま学習の共同化を追求することの意味」 山下政俊「90年代における学習の行方」 〔実践記録・学習に「共同」して取り組む〕 浅見慎一「どの子にも出番をつくる中で」 谷内博司「手ぶくろを買いに」 中川晋輔「放課後の学習会をどう組んだか」

年　月	著書・論文　　所収雑誌・出版社
1990. 3	川辺克己「一本の線にクラスの呼吸を合わせる」
	中村勝彦「学習に『共同』して取り組ませるための教師のちからを」
3	恒吉宏典「『見えない指導案』の構想」（『学校教育』872号）
	久田敏彦「指導案づくりと学習集団の形成」（同上）
3	藤原幸男「1980年代における学習集団研究の動向」（『琉球大学教育学部紀要』第36集）
4	大西忠治「連載・私のゆるやかな集団づくり」（『中学校学級経営』49～60号）
	1. 生徒たちとの最初の出逢いのために（90. 4）
	2. 班つくりとは、班の編成を急がないことである（90. 5）
	3. ゆるやかに班を編成すること（90. 6）
	4. 4分で班長会を（90. 7）
	5. 指導記録のない実践は経理帳簿のない会社経営である（90. 8）
	6. 学級総会で発言しない生徒たちに（90. 9）
	7. 学級総会の指導（90. 10）
	8. 議事法・議長の指導（90. 11）
	9. 学校とは何かを生徒と対話すること（90. 12）
	10. 子ども集団の発見 ── その教育力の発見 ──（91. 1）
	11. 学習集団の理論と実践（91. 2）
	12. 著作集第三部について（91. 3）
4	桑原昭徳「学年はじめの授業指導 ──『私語』から『公語』へ ──」（『学校教育』873号）
4	坂本光男編・宇貝博『小学校学級づくりブックレット10、授業への集中のさせかた』明治図書
4	坂本光男編・下条晃・和子『小学校学級づくりブックレット11、家庭学習のとりくませかた』明治図書
4	坂本光男編・長井宣彦『小学校学級づくりブックレット12、学習に遅れた子の導きかた』明治図書
5	坂本泰造「新任教師に贈るアドバイス〔授業編〕」（『子どもと教育』201～203号）
	I　いまこそ「集中・熱中・全員参加」の授業を（90. 5）
	II　「認める評価」が子どもを伸ばす（90. 6）
	III　子どもが「やったあ！」と叫ぶ授業の創造（90. 7）
5	桑原昭徳「学級経営」（柴田義松編『教職課程講座・第3巻、学校と社会』ぎょうせい）
5	全生研常任委員会編『新版　学級集団づくり入門・小学校』明治図書
	III　学級集団づくりのすじみち
	5. 学級集団づくりと授業
	1）自主的な学習活動の組織化と学級集団づくり
	2）教科指導の基本的課題
	3）授業における学習集団の指導
	4）学習班の指導
	5）学習リーダーの指導

年　月	著書・論文　　所収雑誌・出版社
1990. 5	6）要望・質問の組織化 7）問答・討論の指導 8）集団学習のスタイルと学習規律の確立
6	大西忠治『生活指導入門』青木書店
6	柴田義松・杉山明男・水越敏行・吉本均編『教育実践の研究』図書文化 第1章第2節　教育的タクトとは何か（吉本均） 第2章第4節　学習指導案の「歴史」と「論理」（吉本均・恒吉宏典・白石陽一・船越勝）
7	高場昭次・河村洋子『学習規律づくりの理論と方法』ぎょうせい
7	家本芳郎『私語・おしゃべりの教育学』学事出版
9	日本教育方法学会編『教育方法19、知育・徳育の構想と生活科の指導』明治図書 Ⅲ　情報化社会における教育の方法・技術と教材・教具の開発 2.　学習集団研究・実践から問うもの（本田敏明）
9	大西忠治「授業における『集団づくり』＝『生活指導』＝『道徳教育』」（『生活指導』417号、90. 9）
10	吉本均「『呼びかける』指導案を構想する」（『現代教育科学』407号）
10	汐見稔幸「新しい学校像をさぐる ── 学力・教養・個性」（『シリーズ中学生・高校生の発達と教育3、学校をつくり変える』岩波書店）
10	竹内常一「日本の授業のゆくえ」（『ひと』90. 10）
11	横須賀薫編『授業研究用語辞典』教育出版（「集団思考」「グループ学習」などの項目あり）
12	桑原昭徳編『ドキュメント・わかる授業の指導 ──小学校高学年の学習集団づくり──』ぎょうせい
12	藤原幸男「授業過程の構造」（『琉球大学教育学部紀要』第37集）
12	子安潤「学力問題と学ぶ生活の再建」（『現代教育科学』109号
1991. 2	折出健二・近藤郁夫・坂本光男編『生活指導にいどむ』青木書店 第7章　授業と生活指導 ──「知」の形成は「観」の形成とどうかかわるか ──（子安潤）
2	庄井良信・中瀬古哲編『子どもの自立と授業の科学』溪水社 第Ⅰ章　授業における「自立」と主体形成 第1節　授業の構造と学習主体の形成（石川正和） 第2節　学習集団における自立と自治の追求（山本敏郎） 第3節　「自立」の思想と授業分析方法論（庄井良信） 第Ⅱ章　子どもの自立と学力形成 第1節　教科指導における自立論の追求（古瀬古哲） 第2節　自立の構造と学力形成（中西匠） 第3節　学び合う学力の構造と学習集団（庄井良信）

年　月	著書・論文　　所収雑誌・出版社
1991. 2	第Ⅲ章　全員参加の学習集団組織論
	第1節　全員参加の学習規律をどう高めるか（住野好久）
	第2節　自立に挑む発問系列の構想（小柳和喜雄）
	第3節　自立の拠点としての班をどう指導するか（山本理絵）
	第4節　教材づくりと学習集団の指導（松田幸夫）
	第Ⅳ章　実践科学としての授業研究
	補論　授業における教師の指導性とは何か（石川正和）
3	吉本　均「よい教材とは何か」（『体育科教育』第39巻第3号）
3	小林一久「体育の授業と新しい教材づくりの課題）（同上）
3	小林信次『いきいき授業づくり』あゆみ出版
3	住野好久「授業における学習規律に関する研究」（『教育方法学研究』第16巻）
	中村美子「授業における学習の共同的性格に関する研究」（同上）
3	戸塚茂則「『学習集団づくり』の授業指導論」（『授業の探求』第2号、兵庫教育大学教育方法学研究室）
3	桑原昭徳「授業における教師の差別と『わかる授業』の創造」（『山口大学教育学部付属教育実践研究指導センター紀要』第2号）
3	齋藤浩志「授業とは何か」（『作文と教育』92年3月臨時増刊号）
4	愛生研学習集団研究部会編『学習集団の指導技術』明治図書
	Ⅰ章　学習集団の指導のすじみち（折出健二）
	Ⅱ章　初期の学習集団の指導技術
	1.　最初の授業で何をどう語るか（池田憲一）
	2.　学習班をどう編成するか（小学校）（加藤辰雄）
	3.　学習班をどう編成するか（中学校）（池田憲一）
	4.　学習リーダーの選出と最初の仕事（加藤元康）
	5.　初期の学習スタイルの指導（子安　潤）
	6.　授業への集中をどうつくりだすか・パート1（鈴木庸裕）
	7.　学習班の指導（小林信次）
	8.　学習集団を育てる初期の問答指導（田中　実）
	9.　初期の実践記録（小林信次）
	Ⅲ章　展開期の学習集団の指導技術
	1.　授業への集中をどうつくりだすか・パート2（鈴木庸裕）
	2.　学習集団を育てる指導言（折出健二）
	3.　学習集団を育てる展開期の問答指導（田中　実）
	4.　班話し合いの指導（小林信次）
	5.　学習リーダー・ガイドの指導（加藤元康）
	6.　学習班をどう再編成するか ── 学習班パート2（加藤辰雄）
	7.　学習集団への評価（山田　綾）
	8.　学習スタイルの解体・再編（山田　綾）

年　月	著書・論文　　所収雑誌・出版社
1991. 4	Ⅳ章　教科固有の学習方法を獲得させる授業 1.　「ごんぎつね」（新美南吉）の授業（加藤辰雄） 2.　単元「日本の資本主義の発展」の指導過程（池田憲一） 3.　詩の授業方法（加藤元康） Ⅴ章　学習集団研究の課題（子安　潤）
4	高場昭次・広島市立五日市南中学校『チャイムのない学校 ── 中学校の学習集団づくり──』ぎょうせい
4	大西忠治『大西忠治「教育技術」著作集　第6巻、授業と学習集団の理論』明治図書
4	大西忠治『大西忠治「教育技術」著作集　第7巻、授業と学習集団の指導技術』明治図書
4	吉本　均「連載・学習集団で授業を改造する」（『中学校学級経営』61号～72号） 1.　生徒たちに「まなざし」と「居場所」を（91.4） 2.　教室を「学問する、まなざしの場所」にする（91.5） 3.　生徒たちの身に語りかける（91.6） 4.　「応答し合う」関係（場所）を成立させる（91.7） 5.　「もう一人の自分」への励まし（91.8） 6.　「居場所」としての班づくり（91.9） 7.　「呼びかける」指導案の構想（91.10） 8.　「導入」とは何か（91.11） 9.　「授業のヤマ場」とは何か（91.12） 10.　授業のクライマックスと学習集団（92.1） 11.　授業展開のタクトをとる（92.2） 12.　構想力としてのキーワード（92.3）
5	「特集、学習への興味・意欲を育てる」（『高校生活指導』108号） 鈴木あぐ里「提起・『生徒を学習主体にする』を問う」 針谷順子「コメント・授業成立の要件とは」 田中邦明「コメント・授業の中の自分を問う」 杉山　雅「コメント・子どもの人格と響きあうために」 西内裕一「論点整理＋視点提起・学習主体の確立に向けた授業づくりのために」 〔実践記録／生きる世界を広げる授業〕 守口　等「遊び気分で授業はルンルン」 町井弘明「ものに働きかけものから学ぶ化学の授業」 藤本英二「聞き書き・仕事の話をきく」 〔実践記録／コメント〕 竹内常一「授業のなかに対話を」 〔授業の中に自治をつくる〕 小田原一清「『学習係』との定例会を通して、自律的『学習集団』の創造を目指す」 丸山義昭「現代文における『何をどう』の体系とは」 小沢彰一「授業の中に討論を！」

年　月	著書・論文　　所収雑誌・出版社
1991. 5	上條隆志「共に世界観を変革できるか」
5	吉本均編『授業と学習集団』第2号、明治図書
	吉本　均「『まなざし』と『語りかけ』と『問いかけ』── 学習集団づくり三つのキーワード ──」
	I　「まなざし」をかけ、教室を学習主体の「居場所」にする
	1. 発達障害をもつH君に、共感と要求のまなざしを（林　和子）
	2. 子どもたちの中に、自立へのまなざしをつくりだす（高橋由美子）
	3. 〔分析〕「居場所」をつくる「まなざし」、拡げる「まなざし」（上野ひろ美）
	4. 認め合う関係で、教室を居場所にする（下柳由美子）
	5. 安心できる教室から「やる気」の起こる教室へ（小泉　靖）
	6. 〔分析〕安心感と達成感を実感させる（戸塚茂則）
	7. 秘められた部分への共感的要求（神崎敏郎）
	8. 生徒の可能性への共感が、個を変え、学級を変える（堀井聖明）
	9. 〔分析〕個と集団の発展のすじ道がみえる（小野拡男）
	II　共感と説得で「否定」を「肯定」に転化する
	1. 子どもが実現できそうな部分に働きかけ、応答関係をつくりだす（今西真子）
	2. 子どもたちの可能性に共感しながら、自ら学ぶ力を育てる（岡本登志恵）
	3. ほめて励ますことで、学級を高める（黒田正子）
	4. 〔分析〕共感的要求で自立を促す（久田敏彦）
	5. 「否定」の中に「肯定」を発見して励ます（上村イツ子）
	6. 身と心のふれ合いによってどの子にもやる気を（工藤　京）
	7. 〔分析〕「共感」を発見し納得させる術（豊田久亀）
	III　呼びかけ・問いかけることで「問う力」（学問）を育てる
	1. からみ合いを指導する（田中光恵）
	2. 〔分析〕からみ合いをつくり、深める（本田敏明）
	3. 「教えたいもの」をつかみ「ヤマ場」を構想する（山下伸明）
	4. 「ヤマ場」のある授業をめざして（兵庫県宍粟郡土万小学校）
	5. 〔分析〕「ヤマ場」へ追い込む（山本順彦）
	6. 「読解」的な発問から「視点」を限定した発問へ（秋山伸宏）
	7. みんなの知恵を結集してつくる授業（谷内幸恵）
	8. 〔分析〕わかり合うことの居場所をつくる（深沢広明）
	9. 子どもの自立と授業づくり（福岡県糸島郡前原町立前原小学校）
	10. 教案づくりの楽しさと定式化（おばせ勝義）
	11. 〔分析〕「礼節をもって対策」の立場からの教案づくりと、子どものつくる「学習めあて」（高田　清）
	連載／「学習集団」の当面する課題 (1)
	諸岡康哉「教科内容と学習集団の関連」
	白石陽一「授業における応答関係の指導」

年　月	著書・論文　　所収雑誌・出版社
1991. 6	「特集、ディベートを授業にどう取り入れるか」（『現代教育科学』415号）
	岡本明人「討議づくりとディベート能力」
	野口芳宏「論破の授業とディベート能力」
	石黒　修「討論の授業とディベート能力」
6	全生研常任委員会編『新版　学級集団づくり入門・中学校』明治図書
	Ⅲ・Ⅲ各領域の集団活動の発展と課題
	2. 学習活動と授業
	1）学級担任と教科担任
	2）学力保障のための学習活動と文化活動としての学習活動
	3）授業における集団づくり ── 授業のなかの自治 ──
	4）教科内容の指導と学習集団の指導
	5）学習集団をどう指導するか
	服部　明『生活指導と授業づくり ── 「いま」をとらえる高校生指導 ── 』高校出版
	下村俊雄「吉本均著『授業の原則』から学ぶ」（『現代教育科学』416号）
	坂本泰造『名人への道・授業づくり』日本書籍
	有園　格「班学習の功罪」（『児童心理』575号）
	「特集、キーワード・戦後授業研究運動史」（『現代教育科学』417号）
	上野ひろ美「二元論から『関わり合う』関係論へ ── 戦後授業研究運動小史 ── 」
	吉本　均「授業を『見る』から授業を『つくる』ことへ」
	鈴木秀一「真の共同研究と集団思考を求めて」
	豊田久亀「陶冶と訓育の統一」
	小田切正「『教科の論理』と『生活の論理』」
	杉山明男「集団主義教育」
	大西忠治「宮坂哲文」
8	豊田久亀・東川持『授業を創る・授業を読む』松籟社
8	池田憲一「討論は民主主義をつくりだす」（全生研常任委員会編『いま、学級の討論をどう起こすか』明治図書）
8	高木安夫「学習問題への取り組みをとおして」（全生研常任委員会編『いま、班活動・班長会の指導をどうおこなうか』明治図書）
9	「今だから語る・あの時私は ──、吉本均先生」（『学校運営研究』387号）
9	庄井良信「『自立』を追求する授業とは何か」（『生活指導』432号）
10	稲越孝雄・岩垣摂・根本橘夫編『学級集団の理論と実践』福村出版
	第Ⅱ部　学習指導の側面における学習集団
	第4章　学習目標の共有と協同的な学習活動（大津悦夫）
	第5章　学び合いの組織化と学習集団の形成（岩垣　摂）
10	「特集、授業の内外で討論を」（『生活指導』433号）
	坂本泰造「いま、求められている授業とは」
	長谷川忠臣「学習に向かう意欲をどう育てたか」
	北林　正「授業をどう再生しようとしたか」

年　月	著書・論文　　所収雑誌・出版社
1991. 10	中川晋輔「どのように授業に参加させようとしたか」
	宍戸洋之「分析、自治活動と学習活動は連続して発展する」
	大森弘志「服部潔氏に聞く ── 子どものやる気をひきだす学習集団の指導」
10	『学力を高める楽しい学級の指導実践選書、10、みんなで高め合う授業づくり』福教社
	〔一年生の実践〕
	楽しく詩の音読をしながら、聞きながら（水内喜久雄）
	学び方のコツと楽しさを子どもたちに（竹山輝雄）
	M君の変化をみんなで待つ（藤原映子）
	〔二年生の学践〕
	子どもたちの伸びる力が授業をつくる（蔵満逸司）
	全員参加をめざして（梶岡　寛）
	みんながシュートをした！（二川政文）
	〔三年生の実践〕
	なぞの地図で学区たんけん（若松寿夫）
	仲間をつなげ、表現生みだす生活画（斎藤勝明）
	子どもの思考を育てる文法の指導（谷口正博）
	〔四年生の実践〕
	12カ月の楽しいイベントで綴る学級づくり（大林芳子）
	学習目標の取り組みをとおして（下瀬川里志）
	子どもの輝きを引きだした荒馬（松尾喜美子）
	茶業は盛んか？（城尾裕志）
	〔五年生の実践〕
	「おれ、音楽をやってもいいよ」（澤野尚子）
	みんなで伸びる授業の創造を（今中兵一）
	歌声の響く学級をめざして（宇埜富美子）
	〔六年生の実践〕
	ビデオを使った人権教育の試み（前田保司）
	「わかりあう」授業をどうつくるか（三野和生）
	なぜかなと考えながら高まる授業と学級集団（千葉久美子）
	〔解　説〕
	みんなで高め合う楽しさを（坂本泰造）
10	「小特集、『討論』を組織する技術」（『高校生活指導』110号）
	薄井道正「授業でどう『討論』するか」
	渡部　淳「教育方法から見たディベート」
11	「特集、『集団をつくる力」の再評価」（『現代教育科学』420号）
	豊田久亀「個の自立を促す集団づくり」
	久田敏彦「コミュニケーションによって『居場所』をつくる」
	藤原幸男「戦後『集団教育観』をめぐる論争」

年　月	著書・論文　　所収雑誌・出版社
1991. 11	藤原幸男「授業における集団思考の組織化 ― 1971年以降の砂沢喜代次の集団思考論 ― 」（『琉球大学教育学部紀要』第39集）
12	「特集、ディベートと集団づくり」（『生活指導』436号）
	湯浅恭正「ディベートと集団づくり」
	赤羽とも子「子どもは討論ごっこが大好き」
	阿部　昇「一語一語で『立証』していく構造論争」
	坂本泰造「実践に見るディベート論」
1992. 1	坂本泰造『集中・熱中・全員参加の授業』福教社出版
2	「特集、今日の『落ちこぼれ』問題と集団づくり」（『生活指導』438号）
	竹内常一「『落ちこぼれ』問題をどうとらえなおすか」
	荒井伸夫「今日の『落ちこぼれ』問題にどう取り組むか」
	〔実践記録／「落ちこぼれ」問題にどう取り組むか〕
	日浦成夫「漢字10問テストへの道」
	小山　登「低学力の子らにどう取り組んだか」
	田辺一馬「『落ちこぼれ』ってなんだ」
	太田真守「里美に生きる力を」
	高橋　廉「分析、『低学力・落ちこぼれ』問題への多様な試み」
3	「特集、個と集団が生きる体育の授業づくり」（『学校体育』45巻3号）
	賀川昌明「体育授業における個と集団の関係」
	細江文利「個と集団が生きる個人スポーツの授業づくりのポイント」
	中村敏雄「『個の確立』をめざすグループ活動」
	三上滋樹「個と集団が生きる器機運動の授業づくり」
	加藤陽子「個と集団が生きる表現運動の授業づくり」
	谷　敏光「個と集団が生きるサッカーの授業づくり」
3	「特集、授業づくりと評価の観点」（『新英語教育』271号）
	阿原成光「『評価』を考える」
	柳　歓子「学ぼうとする力をつける」
	栗原美恵子「『級別式』で11年」
	池田恵子「総合的な評価の実践」
	服部　明「授業の中でどんな評価をしているか」
	浦井由美子「班学習の中での評価」
3	齋藤浩志編『教育実践学の基礎』青木書店
3	坂本光男・笠原恵子『自立を育てる生活指導、小学校1年』労働旬報社
3	坂本光男・浜本　宏『自立を育てる生活指導、小学校2年』労働旬報社
3	坂本光男・小野寺武男『自立を育てる生活指導、小学校3年』労働旬報社
3	坂本光男・酒井還成『自立を育てる生活指導、小学校4年』労働旬報社
3	坂本光男・松山正敏『自立を育てる生活指導、小学校5年』労働旬報社
3	坂本光男・荒井伸夫『自立を育てる生活指導、小学校6年』労働旬報社

年　月	著書・論文　　所収雑誌・出版社
1992. 3	家本芳郎『楽しい「授業づくり」入門』高文研
3	藤原幸男「学習集団づくりを基底とした授業指導論の形成過程 ── 1959～79年における吉本均の授業指導論の展開 ── 」（『琉球大学教育学部紀要』第40集）
4	「特集、学力を育てる」（『生活指導』441号） 折出健二「勉強ができるとはどういうことか」 〔実践記録、学ぶ意欲・学び合いをどう育てたか〕 宮下順夫「学力のすそ野を豊かにたがやす ── みんなで「いっぱい読もうぜ」 長谷川忠臣「学習を子どもたちのものに」 岩永　透「『ひとり読み』と『学習班』活動をとおして」 原田　健「まず、インパクト ── アウシュビッツを教材化する ── 」